報　　文

# 体育的遊びを通して獲得される幼児の運動技能

西田　明史

（西九州大学短期大学部　幼児保育学科）

（平成 24 年 12 月 22 日受理）

## Preschool Children's Motor Skills that Have Been Acquired by the Physical Education Play

Akihito NISHIDA

( *Department of Early Childhood Education and Care,*
*Nishikyushu University Junior College* )

(Accepted December 22, 2012)

**Abstract**

In this research, we have examined the current status of the motor skills of preschool children acquired through the physical education play that is intentional, deliberate guidance by specialized instructors. The subjects of the study was of 555 people were boys and girls between the ages of 5.5 to 6.5 years. The survey items were performance tests using a total of 18 items in six events that were created by year program of physical education play.

As a result, the physical education play had made it possible to experience a wide variety of the basic movement behavior in a variety of conditions. And, this experience suggests the possibility that is tied to the acquisition of motor skills.

Key word : Preschool Children 幼児
Physical Education Play 体育的遊び
Specialized Instructor 専門の指導者
Performance Test パフォーマンステスト
Achievementrate 成就度

## 1．はじめに

2012年３月に文部科学省から「幼児期運動指針」[1]が策定された。この指針では、幼児期の運動の在り方について、発達の特性に応じた様々な遊びを通して楽しく身体を動かしながら多様な動きを獲得することの重要性が明示されている。つまり、幼稚園・保育所などにおいては、幼児の多様な動きを引き出し、それらの動きを洗練させていくような保育活動を意図的・計画的に展開する実践力が求められる。

幼児の運動技能と運動遊びに関する研究によると、体育指導者の監修のもと作成された運動遊びプログラムは、幼児の多様でダイナミックな動作経験の誘因となった[2]。普段の多様な運動動作の経験は、運動能力の向上に寄与し、基本的運動動作の獲得が動作の結合を支えて運動能力の発達につながる[3]。基礎的運動動作を意図的に組み入れた運動遊びプログラムの実践は、幼児の身体能力の伸びに影響を与え、特に多様な動きを経験できる総合的運動遊びが調整力に関するスキルの向上に貢献していた[4]。さらに、基礎技能の習得も目標に含めた体育教室に参加する幼児の運動能力は全国標準値よりも高い[5]。

運動技能の発達について、ガラヒューの運動発達段階モデルによると、幼児期は、初期・基本・熟練の３つのステージを経て基礎的な運動技能が習得される時期に相当する[6]。子どもの身体機能の発達は「動作の習得」「ねばり強さ」「力強さ」の順に進み、「動作の習得」のピークは、幼児期から小学校の低学年頃である[7]。また、運動技能は、運動能力を基盤としているものの、両者は相互に影響し合う関係である。ラルソンの運動能力の階層構造によると、基礎的運動技能を高めることは、スポーツ技能の向上に結びつくばかりでなく、基礎運動能力や体格・身体機能を高めることにもつながる[8]。運動パフォーマンスの基準達成度の合否判定によって捉えられる運動能力とCGS単位によって量的にとらえられる運動能力は高い関係にあるが、両者の関係は年齢が高くなるにつれて低下する傾向にあった[9]。

以上のことより、幼児期の運動発達について理解を深めるためには、運動能力ばかりではなく、運動技能の発達の特徴についても把握することが重要になる。運動技能は運動経験によって獲得される。幼児期の運動技能の実態を検証するためには、運動技能の獲得に結びつく保育活動の内容・方法の把握が不可欠である。また、保育場面における遊びが幼児の興味や性格による影響を受け得る[10]のであれば、幼児の多様な運動経験の保障には、保育者を含めた指導者の積極的な介入、つまり意図的・計画的な運動遊びの実践が必要だと考えられる。

そこで本研究では、専門指導者により意図的・計画的に指導されている運動遊び（以下､「体育的遊び」と記す）への取り組みを通して、幼児がどのような運動動作を経験し、どのような運動技能をどの程度獲得しているのかについて調査・検討した。

## 2．研究方法

### 2.1. 調査対象者

本研究の対象は、体育的遊びの実践を保育に組み入れている九州４県の幼稚園・保育所に在籍する年長児555名（男児256名、女児299名）であった。なお、対象児の内訳は、種目によって異なるため、その最大値を表１に示した。

**表１　運動能力測定の対象人数（最大値）**

| | ５歳後半 | ６歳前半 | ６歳後半 | 計 |
|---|---|---|---|---|
| 男児 | 120 | 120 | 16 | 256 |
| 女児 | 139 | 139 | 21 | 299 |
| 計 | 259 | 259 | 37 | 555 |

（名）

### 2.2. 調査項目およびデータ収集の方法

運動技能の調査には、体育的遊びの年間プログラムを素材にした６種目（マット､跳び箱､鉄棒､平均台､縄､ボール）各３項目の計18項目からなるパフォーマンステストを作成して用いた（表２）。各パフォーマンステストの成就度については､専門指導員の観察的評価法により､「できない（１点）」「できたり､できなかったりする（２点）」「いつでもできる（３点）」の３段階で評定した（表３）。測定の精度を高めるために、各テスト項目の動作方法と評価の観点をまとめた測定要領を作成した。各専門指導員による評価の客観性・信頼性を高めるために、測定要領の共通理解を図るための研修を２回実施した。

体育的遊びの種類と内容、実施頻度と１回あたりの実施時間について、専門指導員２名に対してインタビュー調査を実施した。なお、体育科学センターが整理した就学前に獲得する84種類の基本的運動動作[11]に照らし合わせながら、体育的遊びの年間プログラム実施時に出現する基本的運動動作を抽出した。

調査期間は、2011年10月中旬から11月中旬までであった。

### 2.3. データ分析

男女児の各グループにおいて、種目内のテスト項目間の差を調べるためにFriedman検定を行った。テスト項目間に有意差が認められた種目について、Bonferroniの方法により有意水準を調整し、Wilcoxonの符号付順位和検定による多重比較を行った。

また、各テスト項目において、男女差を調べるために

**表２　パフォーマンステスト 18 項目の測定方法**

| №. | 測定項目 | 種　類 | 動作方法および評価の観点 |
|---|---|---|---|
| 1） | 横　　転 | マット | マット（幅 90cm･長さ 180cm）の上に腹這いになり、両手を伸ばして頭の上で組む。その姿勢のまま右（または左）に転がり、マットの上から落ちることなく端から端まで移動する。左右の両方向実施する。 |
| 2） | 前　　転 | マット | 両足・両手をしっかりとついて背中を丸め、首・肩・背中の順にマットに接触するように前方に転がった後、かかとを引きつけて起き上がる。マットの中心から左右に大きくはずれないように行う。 |
| 3） | 後でんぐり返り | マット | 踏み板をマットの下に敷いて傾斜を作る。後ろ向きに屈んで背中を丸め、尻･背中･肩・首の順にマットに接触するように後方（マットの高いほうから低いほうへ）に転がる。マットの中心から左右に大きくはずれないように返ることができればよい。 |
| 4） | 踏みとび | 跳び箱 | 踏み台（跳び箱の１段目・横置き；高さ約 20cm）に向かって走り、踏み台を片足で踏んで跳びあがった後、踏み台から約 150cm 離れた目標位置に両足で着地する。一連の動作をリズミカルに行う。 |
| 5） | 支持跳びのり | 跳び箱 | 跳び箱（横置き；高さ約 70cm）に向かって走り、両足踏み切り、跳び箱上への着手（両手）の後、両腕でからだを支持しながら跳び箱の上に跳びのる。一連の動作をリズミカルに行う。 |
| 6） | 開脚跳び | 跳び箱 | 跳び箱（横置き；高さ約 70cm）に向かって走り、、両足踏み切り、跳び箱上への着手（両手）の後、両腕でからだを支持しながら跳び箱を跳び越える。一連の動作をリズミカルに行う。 |
| 7） | 前回りおり | 鉄　棒 | 鉄棒 ( 高さ 90 ～ 110cm）に跳び上がって正面支持の姿勢になる。その姿勢のから、あごを胸にひきつけるようにして背中を丸め、前方に回りながら鉄棒からおりる。一連の動作をリズミカルに行う。 |
| 8） | 足抜き回り<br>尻上がり | 鉄　棒 | 両手の間をあけて鉄棒 ( 高さ 90 ～ 110cm）にぶら下がり、地面をけって両手の間に足を通すように後方に回転する。その後、地面をけって両手の間に足を通すように前方に回転する。一連の動作をリズミカルに行う。 |
| 9） | 逆上がり | 鉄　棒 | 地面をけって足を振り上げ、腹部を鉄棒 ( 高さ 90 ～ 110cm）に引きつけながら後方に回転した後、上体を起こして正面支持の姿勢になる。一連の動作をリズミカルに行う。補助があるとできる場合には「１」にする。 |
| 10） | 送り足横移動 | 平均台 | 平均台（長さ 200 ～ 300cm・高さ約 30cm・幅約 10cm）の上に進行方向に対して横向きになるようにのる。足を横に開いたり、足を引きつけたりしながら平均台の端から端まで移動する。左右の両方向実施する。 |
| 11） | 腹這い移動 | 平均台 | 平均台（長さ 200 ～ 300cm・高さ約 30cm・幅約 10cm）の上に腹這いになって両手と両足で平均台をはさむ。平均台の上から落ちないようにバランスをとりながら、平均台の端から端まで手と足を使って前方に移動する。 |
| 12） | 前進歩行 | 平均台 | 平均台（長さ 200 ～ 300cm・高さ約 30cm・幅約 10cm）の片端から上にのり、もう片方の端まで歩いて渡った後、平均台からおりる。一連の動作をリズミカルに行う。 |
| 13） | 前まわし跳び | な　わ | １回旋１跳躍もしくは１回旋２跳躍で前まわし跳びを 30 回以上連続して行う。10 回以上 30 回未満の場合には「２」、10 回未満の場合には「１」にする。 |
| 14） | 後まわし跳び | な　わ | １回旋１跳躍もしくは１回旋２跳躍で後まわし跳びを 30 回以上連続して行う。10 回以上 30 回未満の場合には「２」、10 回未満の場合には「１」にする。 |
| 15） | 跳びぬけ | な　わ | 頭の上からかぶさるように回旋している長縄にタイミングよく入り、１回または数回跳び越えた後にくぐり抜ける。タイミングよく入り跳び越せるがくぐり抜けられない、およびその場での跳び越しのみができる場合には「１」にする。 |
| 16） | ボール投げ<br>ボール受け | ボール | ３～５ｍ離れた位置にいる指導者が立ち位置を変えずに受け取ることができるようにボール（直径約 18cm）を投げる。また、３～５ｍ離れた位置にいる指導者から投げられたボール（直径約 18cm）を受け取る。 |
| 17） | ボール蹴り | ボール | 約５ｍ離れた位置にいる指導者が立ち位置を変えずに受け取ることができるようにボール（直径約 18cm）を蹴って転がす。 |
| 18） | まりつき | ボール | 直径１ｍの円内にボール（直径約 18cm）を 30 回以上連続してつく。10 回以上 30 回未満の場合には「２」、10 回未満の場合には「１」にする。 |

**表３　パフォーマンステストの成就度の判定**

| 評定 | 判　定　基　準 |
|---|---|
| １点 ： | やろうとしているが、できない（今までに一度もできたことがない）。補助があれば何とかできる。 |
| ２点 ： | できたり、できなかったりする。できても、身体の動かし方がぎこちなく、大雑把である。 |
| ３点 ： | いつでもできる。身体の動かし方に無駄がなく、スムーズにできる。 |

Mann-Whitney のU検定を行った。

すべての統計処理には、SPSS 20.0J を用い、有意水準は５％未満とした。

## ３．結　果

### 3.1. 体育的遊びプログラムの特徴

５歳児クラスの体育的遊びの年間プログラムの概要を表４に示した。

体育的遊びの年間プログラムは、マット・跳び箱・鉄棒・平均台の大型教材や縄やボールなどの小型教材を用いた活動、水遊び・プール遊び、かけっこ・リレー遊びや鬼遊びなどの集団遊びによって構成されていた。年度末の２・３月には、それまでに経験した様々な遊びを取り入れたサーキット遊びが実施されていた。なお、プログラムは一斉指導の形態で展開されており、１回あたりの実施時間は50分、実施頻度は週１回であった。

体育遊びの年間プログラムを実施する際に出現する運動動作を見ると、幼児が就学前に獲得する基本的運動動作の大部分が経験可能であった（表５）。具体的には、平衡系動作区分の姿勢変化において、11項目すべての動作を経験できていた。移動系動作区分を見ると、上下運動では３項目すべて、水平運動では８項目のうち「滑る」を除いた７項目、回転動作では７項目すべての動作を経験できていた。操作系動作区分を見ると、荷重動作では10項目のうち「こぐ」「落とす」を除いた８項目、脱荷重動作では３項目のうち「浮かべる」を除いた２項目、捕捉動作では11項目のうち「掘る」を除いた10項目、攻撃的動作では12項目のうち「打つ」「割る」「くずす」「振り落す」を除いた８項目の動作を経験できていた。

### 3.2. 体育的遊びを通して獲得される運動技能

男女児間・テスト項目間におけるパフォーマンステストの成就度の比較した結果を表６に示した。

マット運動の各テスト項目の成就度を見ると、「横転」「前転」は男女ともに「いつでもできる」の割合が80％

**表４　体育的遊びの年間プログラムの概要（５歳児）**

| 月 | | 4 | 5 | 6 | 7・8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2・3 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ねらい | | • 並び方を知る<br>• 基本的な約束を守る<br>• 体育あそびの日を通して積極的に運動する | • いろいろな遊具で喜んであそぶ<br>• 調整力を養う | • 体育遊具の安全な使い方を知る<br>• スピード感を養う | • 水に慣れ、水遊びに積極的に参加する<br>• 水あそびを楽しむ | • ルールのある集団的体育あそびを楽しむ<br>• 協調性を養う | • 運動会を通して協力する喜び、目標達成の喜びを知る<br>• 巧緻性を養う | • 体育遊具などで工夫してあそぶ<br>• みんなでルールを考えたり、決めたりしてあそぶ | • 運動量の多いあそびをする<br>• 寒くても外で元気にあそぶ<br>• 全身を動かしてあそぶ | • 安全に気をつけて思い切りあそぶ | • 不得意な運動やあそびをすすんでする<br>• 集中して取り組み、一生懸命やりとげる態度を養う |
| 体育教材を使った運動と遊び | マット | いろいろな歩き方・走り方<br>川とび（大）<br>ライダーキック | マットくぐり<br>山登り<br>おいもコロコロ | えんぴつコロコロ<br>でんぐり返り<br>手なしでんぐり返り | 水中行進（電車、カニ・カエル・ワニ等）<br>うずまき（洗濯機）みずかけ、コップ・洗面器で水送り、花火等顔つけ（宝探し・水中じゃんけん等）<br>棒・フープくぐり<br>くらげうき・ウルトラマン（ふし浮き）<br>メリーゴーランド（背浮き）<br>ロケット<br>モーターボート | 前転<br>輪くぐり前転<br>二人で前転 | 丸太ころがし<br>前転 | 手押し車<br>後でんぐり返り | ケンケンずもう<br>ごぼう抜き | • 大型の体育教材を使ったサーキット遊び | • 課題遊び<br>• 総合的サーキット遊び |
| | 跳び箱 | 忍者とび<br>ねらいおり | 指令とび<br>ジャンプアタック<br>跳びのり | カエルのり<br>とび下り<br>うまとび（横） | | うまとび（横） | うまとび（横）<br>連続うまとび（横） | 人間うまとび | うまとび（縦） | | |
| | 鉄棒 | ぶらさがり<br>足抜きまわり<br>尻あがり | 前まわりおり<br>コウモリさがり | ぶらさがり<br>さかあがり | | さかあがり<br>二人でさかあがり | さかあがり | さかあがり（連続） | | | |
| | 平均台 | ２本橋渡り<br>クマ歩き | カニ歩き<br>一本橋渡り | モノレール<br>さかあがり | | スズメの学校 | ジグザグとび<br>一本橋渡り | おじゃま虫<br>すれちがい | ジャンケン陣取り | | |
| | なわ | | | | | | いろいろな回し方<br>走りとび<br>ウサギとカメ | あまだれとび<br>前まわしとび<br>大波・小波 | 後まわしとび<br>曲芸まわし<br>ゆうびんやさん | いろいろなとび方<br>連続とび<br>跳び抜け | |
| | ボール | | | | | | ボール転がし・渡し<br>バウンドキャッチ | なか当て<br>まりつき | ウサギと狩人<br>ドッチボール | ドッチボール<br>ラインサッカー | |
| その他の遊び | | ストップゲーム<br>組つくりゲーム | タコとタヌキ<br>オオカミさん、今何時？ | 三匹のこぶた<br>トムとジェリー<br>クルクルランド | | 高崎山<br>しんぺいくんゲーム | タッチリレー<br>トムとジェリー | ネズミのしっぽとり<br>てつなぎ鬼 | 帰ってきたもたろう<br>ジャンケンゲーム | 氷鬼<br>どろけい | |

注）ａ．プログラムの実施時間は50分／回、頻度は１回／週であった。
ｂ．各園の運動会が終了した10月上旬以降に運動能力測定を実施し、運動能力測定が終了した後に運動技能の成就度を測定した。
ｃ．下線を付した活動は、パフォーマンステスト項目。

## 表５　体育的遊びを通して経験できる運動動作

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 平衡系 | 姿勢変化 | 寝る（・寝転ぶ） | 起きる（・起き上がる） | 立つ（・立ち上がる） | 逆立ちする |
| | | かがむ・しゃがむ | 回る（，転がる） | ぶら下がる | 浮く |
| | | 渡る（・歩き渡る） | 乗る（・乗り回す） | 組む | |
| 移動系 | 上下運動 | 登る（，はい登る・よじ登る） | 降りる(滑り降りる, 跳び降りる） | 跳ぶ（，跳び上がる，跳びつく，跳び乗る，跳び越す） | |
| | 水平動作 | 這う | 歩く | 走る（・かける） | 追う（・追いかける） |
| | | 跳ねる（ギャロップする，スキップ・ホップする，２ステップ・ワルツする） | | | |
| | | 泳ぐ | 滑る | 踏む | |
| | 回転動作 | 止まる | かわす | 逃げる（・逃げ回る） | 隠れる |
| | | くぐる（・くぐり抜ける） | 入る（・入り込む） | 潜る | |
| 操作系 | 荷重動作 | 持つ（・持ち上げる，上げる） | 担ぐ（，おぶう・おぶさる） | 運ぶ（・運び入れる） | 起こす（・引っぱり起こす） |
| | | 支える | 押す（・押し出す） | 押さえる（・押さえつける） | 動かす |
| | | こぐ | 落とす(投げ落とす, 突き落とす) | | |
| | 脱荷重動作 | おろす（・かかえておろす） | もたれる（，もたれかかる） | 浮かべる | |
| | 捕捉動作 | つかむ（・つかまえる） | 受ける（，受け止める） | 止める | 回す |
| | | 転がす | 積む（・積み上げる） | 当てる | 入れる |
| | | 渡す | 振る（・振り回す） | 掘る | |
| | 攻撃的動作 | たたく | つく | 引っ張る（・引く） | しばる（・しばりつける） |
| | | 投げる（・投げ上げる） | 打つ(・打ち上げる・打ちとばす) | 蹴る（・蹴りとばす） | 割る |
| | | くずす | 倒す（・押し倒す） | 振り落とす | すもうをとる |

注）網掛け箇所は体育的遊びの年間プログラムを通して経験できた運動動作。

## 表６　男女児間・テスト項目間におけるパフォーマンステストの成就度の比較

| 種類 | 測定項目 | 性 | n | 成就度（%）いつでもできる（３） | できる，できない（２） | （１） | 男女児間比較[a] 中央値 | 順位総和 | U | z | p | 項目間比較[b] 男児 $\chi^2$ | p | （n） | 女児 $\chi^2$ | p | （n） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| マット | 横転 | 男児 | 256 | 80.9 | 18.8 | 0.4 | 3.00 | 69119.5 | 36223.5 | -1.70 | .089 | 101.57 †† | .000 | (238) | 126.38 †† | .000 | (271) |
| | | 女児 | 299 | 86.6 | 13.1 | 0.3 | 3.00 | 85170.5 | | | | | | | | | |
| | 前転 | 男児 | 256 | 83.2 | 16.0 | 0.8 | 3.00 | 69841.0 | 36945.0 | -1.14 | .254 | 横転 > 後返り<br>前転 > 後返り | | | 横転 > 後返り<br>前転 > 後返り | | |
| | | 女児 | 299 | 86.6 | 13.0 | 0.3 | 3.00 | 84449.0 | | | | | | | | | |
| | 後でんぐり返り | 男児 | 238 | 52.5 | 24.4 | 23.1 | 3.00 | 59910.0 | 31469.0 | -0.52 | .603 | | | | | | |
| | | 女児 | 271 | 54.6 | 24.0 | 21.4 | 3.00 | 69885.0 | | | | | | | | | |
| 跳び箱 | 踏み跳び | 男児 | 255 | 83.5 | 15.3 | 1.2 | 3.00 | 70551.0 | 37911.0 | -0.07 | .944 | 14.54 †† | .001 | (255) | 70.56 †† | .000 | (298) |
| | | 女児 | 298 | 83.9 | 14.1 | 2.0 | 3.00 | 82630.0 | | | | | | | | | |
| | 支持跳びのり | 男児 | 256 | 84.8 | 10.9 | 4.3 | 3.00 | 72264.5 | 37175.5 | -0.90 | .370 | 踏跳び > 支持跳乗<br>踏跳び > 開脚跳越 | | | 踏跳び > 支持跳乗<br>踏跳び > 開脚跳越 | | |
| | | 女児 | 299 | 81.9 | 12.7 | 5.4 | 3.00 | 82025.5 | | | | | | | | | |
| | 開脚跳び越し | 男児 | 256 | 74.2 | 20.3 | 5.5 | 3.00 | 76437.0 | 33003.0 | -3.39 ** | .001 | | | | | | |
| | | 女児 | 299 | 61.5 | 26.1 | 12.4 | 3.00 | 77853.0 | | | | | | | | | |
| 鉄棒 | 前回りおり | 男児 | 254 | 93.3 | 1.6 | 5.1 | 3.00 | 69766.0 | 37381.0 | -0.27 | .788 | 147.33 †† | .000 | (254) | 179.79 †† | .000 | (296) |
| | | 女児 | 296 | 93.9 | 0.7 | 5.4 | 3.00 | 81759.0 | | | | | | | | | |
| | 足抜きまわり・尻上り | 男児 | 254 | 86.2 | 2.8 | 11.0 | 3.00 | 68476.5 | 36091.5 | -1.45 | .146 | 前回下 > 足抜尻上 > 逆上り | | | 前回下 > 逆上り<br>足抜尻上 > 逆上り | | |
| | | 女児 | 296 | 90.2 | 2.0 | 7.8 | 3.00 | 83048.5 | | | | | | | | | |
| | 逆上がり | 男児 | 254 | 56.3 | 3.5 | 40.2 | 3.00 | 70033.5 | 37535.5 | -0.03 | .972 | | | | | | |
| | | 女児 | 296 | 56.1 | 3.7 | 40.2 | 3.00 | 81491.5 | | | | | | | | | |
| 平均台 | 送り足移動 | 男児 | 237 | 97.5 | 2.5 | 0.0 | 3.00 | 60220.5 | 32017.5 | -0.22 | .825 | （z）[c] 18.87 | .317 | (254) | （z）[c] 18.87 † | .046 | (254) |
| | | 女児 | 271 | 97.8 | 1.5 | 0.7 | 3.00 | 69065.5 | | | | | | | | | |
| | 腹這い移動 | 男児 | 44 | 未実施多数のため分析項目から除外 | | | | | | | | | | | 前歩行 > 送移動 | | |
| | | 女児 | 71 | | | | | | | | | | | | | | |
| | 前進歩行 | 男児 | 237 | 98.7 | 1.3 | 0.0 | 3.00 | 60150.0 | 31947.0 | -0.59 | .555 | | | | | | |
| | | 女児 | 271 | 99.3 | 0.0 | 0.7 | 3.00 | 69136.0 | | | | | | | | | |
| なわ | 前まわし跳び | 男児 | 252 | 40.9 | 17.9 | 41.3 | 2.00 | 64012.0 | 32134.0 | -3.09 ** | .002 | 78.80 †† | .000 | (158) | 49.62 †† | .000 | (178) |
| | | 女児 | 297 | 50.8 | 21.9 | 27.3 | 3.00 | 86963.0 | | | | | | | | | |
| | 後まわし跳び | 男児 | 252 | 23.8 | 13.1 | 63.1 | 1.00 | 62950.5 | 31072.5 | -3.68 ** | .000 | 跳抜け > 前跳び > 後跳び | | | 跳抜け > 後跳び<br>前跳び > 後跳び | | |
| | | 女児 | 295 | 34.6 | 18.6 | 46.8 | 2.00 | 86927.5 | | | | | | | | | |
| | 跳び抜け | 男児 | 158 | 60.8 | 13.3 | 25.9 | 3.00 | 26192.0 | 13631.0 | -0.66 | .508 | | | | | | |
| | | 女児 | 179 | 63.1 | 15.6 | 21.2 | 3.00 | 30761.0 | | | | | | | | | |
| ボール | ボール投げ・ボール捕り | 男児 | 250 | 77.2 | 20.0 | 2.8 | 3.00 | 68236.0 | 33639.0 | -1.20 | .229 | 252.81 †† | .000 | (250) | 271.02 †† | .000 | (281) |
| | | 女児 | 282 | 72.3 | 25.5 | 2.1 | 3.00 | 73542.0 | | | | | | | | | |
| | ボール蹴り | 男児 | 250 | 80.4 | 18.8 | 0.8 | 3.00 | 67623.5 | 34001.5 | -0.90 | .369 | 投捕 > まりつき<br>蹴り > まりつき | | | 投捕 > まりつき<br>蹴る > まりつき | | |
| | | 女児 | 281 | 77.6 | 19.6 | 2.8 | 3.00 | 73622.5 | | | | | | | | | |
| | まりつき | 男児 | 256 | 31.3 | 21.9 | 46.9 | 2.00 | 71156.0 | 38260.0 | -0.01 | .995 | | | | | | |
| | | 女児 | 299 | 24.7 | 33.4 | 41.8 | 2.00 | 83134.0 | | | | | | | | | |

注）a：Mann-Whitney のＵ検定を用いた。　** p <.01
b：Friedman 検定を用いた。多重比較には，Wilcoxon の符号付順位和検定（Bonferroni の方法で有意水準を調整）を用いた。† p <.05　†† p <.01
c：Mann-Whitney のＵ検定を用いた。　† p <.05

に達していた。また、「後でんぐり返り」は、他の項目よりも成就度が有意に低く、「いつでもできる」の割合が男児52.5%、女児54.6%であった。なお、いずれの項目においても男女差に有意性は認められなかった。

跳び箱遊びの各テスト項目の成就度は、「踏み跳び」「支持跳びのり」は男女ともに「いつでもできる」の割合が80%以上に達していた。また、「開脚跳び越し」は、他の項目よりも成就度が有意に低く、「いつでもできる」の割合が男児74.2%、女児61.5%であった。なお、男女児間を比較した結果、「開脚跳び越し」のみに有意な差が認められた。

鉄棒遊びの各テスト項目の成就度を見ると、「前回りおり」「足抜きまわり・尻あがり」は男女ともに「いつでもできる」の割合が90%程度までに達していた。また、「逆上がり」は、他の項目よりも成就度が有意に低く、「いつでもできる」の割合が男児56.3%、女児56.1%であった。なお、いずれの項目においても男女差に有意性は認められなかった。

平均台遊びの各項目の成就度を見ると、「送り足移動」「前進歩行」は男女ともに「いつでもできる」の割合が100%にほぼ近い値にまで達していた。いずれの項目においても男女差に有意性は認められなかった。なお、「腹ばい移動」は未実施が多数であったために分析項目から除外した。

なわ遊びの各テスト項目は、男女ともに他種目よりも成就度が低く、3項目のうちで最も高かった「跳び抜け」においても「いつでもできる」の割合が男児60.8%、女児63.1%であった。「後まわし跳び」は他項目よりも成就度が有意に低く、男児23.8%、女児34.6%であった。また、「前まわし跳び」「後まわし跳び」の成就度は、女児が男児よりも有意に高かった。

ボール運動の各テスト項目の成就度を見ると、「ボール投げ・捕り」「ボール蹴り」の「いつでもできる」の割合は男女ともに70%以上であった。また、「まりつき」は、他の項目よりも成就度が有意に低く、「いつでもできる」の割合が男児31.3%、女児24.7%であった。なお、いずれの項目においても男女差に有意性は認められなかった。

## 4．考　察

調査対象の体育的遊びの年間プログラムは、多種類の体育教材を用いて、多様な動作を様々な条件下で繰り返し経験できるように意図的・計画的に組み立てられていた。すなわち、幼児の多様な動作を引き出すためには、特性の異なる多種類の教材の活用が有効であると考えられる。その際、特性を活かした教材の使い方とその教材において経験可能な動作の多様性の確保が必要である。

体育的遊びにおいて出現しなかった基本的運動動作の多くは、家庭または保育における生活や遊びの場面で見ることができる。たとえば、移動系動作区分の「滑る」はすべり台等での遊びにおいて経験することができる。また、操作系動作区分の「こぐ」は三輪車や自転車、「掘る」は砂場遊びや植栽活動において経験できる。多様な動作の経験は、生活と遊びのそれぞれにおいて相互補完的に展開されていくことが望ましい。したがって、調査対象の体育遊びは、普段の生活や遊びにおいてあまり見られない運動動作を経験する貴重な機会になっていたと考えられる。

本研究における各パフォーマンステストの成就度の結果を見ると、「いつでもできる」の割合が80%程度にまで達していた項目は、男女児ともに5種目で計10項目あった。「できない」の割合が40%を超える項目は、鉄棒運動の「逆上がり」、縄運動の「後まわしとび」、ボール運動の「まりつき」の計3項目あった。すなわち、対象児は、体育的遊びの実践により様々な運動技能を獲得していたと言える。また、18項目中3項目において男女差に有意性が認められた。跳び箱運動の「開脚跳び越し」は男児、なわ運動の「前まわし跳び」「後まわし跳び」は女児のほうが優れていた。本研究の結果は、動作の評価観点が多少異なるものの、5歳児の運動あそび習得率を調査した石崎ほか[12]の報告と類似している。したがって、多くのパフォーマンステストにおいて男女差が認められず、成就度が高かったことを鑑みれば、調査対象の体育的遊びプログラムは、5歳児の発達特性を捉えた内容を含んでおり、体育の専門指導員によって適切に展開されて可能性が高いと考えられる。

種目別に見ると、鉄棒遊びは、他種目と比較すると、〈できる－できない〉がはっきりとしていた。体育的遊びを通して、幼児が〈できた〉や〈努力すればできる〉と実感できるようにするためには、環境設定・指導法の工夫（多様性）が必要だと考えられる。ボール遊びでは、「投げる」「捕る」「蹴る」の成就度が高かったことから、これらを基本動作とするゲーム等の実践（または指導）により、ボール操作技能の向上が期待できる。

調査対象の体育的遊びプログラムは一斉指導の形態で展開されていた。この点に関しては、杉原ほか[13]が指摘する「説明を聞いたり順番を待ったりする時間が長く、身体を動かす時間が少ない」との問題を看過できない。保育者を含めた指導者による意図的・計画的な運動遊びにおいては、〈できる〉技能および〈努力すればできる〉経験を基盤としたプログラムの実践により、運動する機会を幼児自らが創出または拡大していけるようなプログラムの在り方、運動量（時間・頻度）の確保が課題だと考えられる。また、専門指導者による意図的・計画的な遊びが保育の一環として実施されている状況を鑑みれ

ば、周囲の子どもや保育者と触れ合い、安定し主体的に活動に参加できるような環境作りが必要だと言える。

以上のことより、専門指導員による意図的・計画的な運動遊びの実践は、様々な条件下における多様な基本的動作の経験が運動技能の獲得に結びついている可能性が示唆された。すなわち、保育者または体育の専門指導員による一斉指導の形態で展開されている運動遊びであっても、経験する運動の質（動作の多様化）は保障されていると考えられる。

## ５．まとめ

本研究では、専門指導員により意図的・計画的に指導されている運動遊びを通して幼児が獲得する運動技能の実態について検討した。５歳後半から６歳後半までの男女児 555 名を対象に運動遊びの年間プログラムを素材にした６種目各３項目の計 18 項目からなるパフォーマンステストの成就度を測定した。調査は、2011 年 10 月上旬から 11 月上旬にかけて専門指導員によって実施された。その結果、以下の知見を得た。

「いつでもできる」の割合が 80％程度にまで達していた運動技能は、男女児ともに５種目で計 10 項目あった。「できない」の割合が 40％を超える項目は、鉄棒運動の「逆上がり」、縄運動の「後まわしとび」、ボール運動の「まりつき」の計３項目あった。18 項目中３項目において男女差に有意性が認められた。跳び箱運動の「開脚跳び越し」は男児、なわ運動の「前まわし跳び」「後まわし跳び」は女児のほうが優れていた。

本研究では、専門指導員による意図的・計画的な運動遊びの実践が多様な運動技能の獲得に結びついている可能性が示唆された。しかしながら、運動遊びの効果を明確にするためには、「事前－事後」「実験群－統制群」の比較が必要である。また、調査対象の運動遊びプログラム内容を勘考すると、小学校低学年の体育の学習内容、特に「体つくり運動」との関連も視野に含めながら研究を進めていく必要もある。

## 文　献


１）文部科学省幼児期運動指針策定委員会（2012）幼児期運動指針ガイドブック－毎日，楽しく体を動かすために－．http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/undousisin/1319772.htm：（参照日 2012 年６月）.

２）前橋明・掛尾真夕子（1997）幼児を対象にした運動体験プログラム（ＭＥＰ）の計画と実践．幼小児健康教育研究，６(1)：16-32.

３）田中沙織（2009）幼児の運動能力と基本的運動動作に関する研究 – 自由遊びに見る運動能力別の基本的運動動作比較の試み –．幼年教育研究年報，31：83-88.

４）松嵜洋子・無藤隆（2011）幼児の運動遊びに関する研究－運動遊びの種類による運動スキルの向上への影響の違い－．乳幼児教育研究，20：81-93.

５）石崎桂子・三村寛一・近森卓ほか（1996）幼児の体育カリキュラムに関する研究（第４報）– ５歳児の体育あそびのプログラムについて –．大阪教育大学紀要第Ｖ部門，45(1)：91-106.

６）Gallahue, D. L.（1999）幼少年期の体育－発達的視点からのアプローチ－, 杉原隆監訳. 大修館書店：東京.

７）宮下充正（1985）子どものからだ 科学的な体力づくり．東京大学出版会：東京.

８）村瀬智彦（2005）幼児の体力・運動能力の科学－その測定評価の理論と実際－，出村慎一監修．ナップ：東京.

９）郷司文男・出村慎一・春日晃章ほか（1999）合否判定に基づく幼児の運動能力テストと間隔尺度に基づくテストの関係．体育学研究，44：345-359.

10）杉原隆・吉田伊津美・森司朗ほか（2010）幼児の運動能力と運動指導ならびに性格との関係. 体育の科学，60(5)：341-347.

11）民秋言・穐丸武臣（2009）保育内容 健康．北大路書房：京都.

12）石崎ほか（1996）前掲.

13）杉原ほか（2010）前掲.


## 謝　辞


本研究にご参加いただいた幼稚園および保育所の幼児や職員の皆様、西日本幼児体育研究所代表の林健一氏ならびに同所スタッフの皆様には、本研究の実施に際し多大なご協力をいただきました。ここに記して皆様に心より深謝申し上げます。


## 付　記


本論文は、九州体育・スポーツ学会第 61 回大会において発表した内容を加筆・修正したものである。